

落　　ち　　椿

森本真智子

ハタリと音がして 椿の花は落ちたのだった
ハタリと音がしたのも

錯覚だったかも知れないと思ったほど

それは、かすかな音であり

私はむしろ 気配だけで 振り向いたのかもしれない

黄色の花粉を 大地に わずかに散らし

花は 落ちたそのままの姿で ため息をつくほど 美しかった

地に落ちた花は 花弁のひとつもほどこことなく

一本の雌しべを残して

抱かれていた緑の うてなに ひっそり別れを告げたのだった

海を渡った島には 椿の花で糸を染め

ハタを織る女性たちが いるという

織り上げた布は 椿の花の あの濃い緋色には遠く

ほのかに淡い 紅色をしているのだという

固く青い 小さな蕾を作った椿の木たちは

その蕾が 赤く開くまでの長い時間と

やっと咲かせた花が

あっけなく地に落ちるまでの 短い時間を

思ったことはあるのだろうか

ひとも また同じかもしれない

美しい時間は 短いものであろう

だが人は 決して あっけなく落ちて 朽ちたりはしない

長く 長く 花を咲かせ続けることができるのだ

そして人は 朽ちない 多くの実をつけることも出来る

生き物なのだから

